モノグラフ・高校生'84

vol.13 高校生の親子関係

——反抗期の喪失をめぐって——

見本

© 1984(株)福武書店 教育研究所／加藤智禧・和田京子・遠藤純子
高校教育研究会／深谷昌志(放送大学教授)
前田一美(日本医療福祉専門学院専任講師)・植木陽子(東京学芸大学大学院生)

目次

はじめに……2

第Ⅰ章　調査の要約とテーマ……4
1　調査の要約……4
2　テーマ設定……5

第Ⅱ章　母と子の関係を中心に……9
1　高校生を持つ母親……9
2　母と子との距離……19
3　親への依存と自立……30

第Ⅲ章　子どもと父親……41
1　父親たちの現在……41
2　子どもと父親とのふれあい……51
3　子どもが父親を越えるとき……61

まとめに代えて……69

資料　調査票見本および集計表……73

「はじめに」●

親の許に依存する高校生

一昔前まで、高校生にとっての親子関係などというテーマは、研究対象としての意味を持たなかった。反抗期が終わりに近づく。そうかといって、自分の家庭を作るのは数年先のことというわけで、高校生時代は、人生の中で、家庭の影のもっとも少ない時期と思われていた。だから、高校生に家庭生活を尋ねても、家庭離れが浮きぼりにされる程度の意味しか持たなかったのである。

ところが、このところ、物質面だけでなく精神的な面でも、親に依存している高校生が目につく。休日などの町角で、体は大きくなったのに、小学生のように、親にまとわりついている高校生の姿を見かけることが多い。いつまでも、子どもを依存させる親の気持ちもわかりにくいが、子どもの方も、どうして親離れしないのか理解に苦しむ。

といっても、第二次反抗期を媒介として親離れをするというとらえ方は古典的にすぎ、現在は、それとは別の成長のスタイルの許で子どもが巣立っているのかもしれない。

そうした疑問に答えて実施したのが本調査である。結果は本文にふれる通りだが、親に依存する高校生の姿があらわになったような感じがする。しかし、新しい情況だけに現象面の分析に追われ、理論化への試みを十分に果たしえなかったうらみが残る。なお本調査シリーズ中の「中学生の世界」のvol.19で、「中学生の親子関係――依存と自立の谷間で――」をとりあげる予定なので、本調査に関心を持たれた方は、そちらのデータにもあわせて目を通して欲しいと思う。

昭和59年11月

放送大学教授　深 谷 昌 志

調査の企画

高校教育研究会

代表　深谷　昌志　（放送大学教授）
　　武内　　清　（武蔵大学教授）
　　明石　要一　（千葉大学助教授）
　　石崎　廣義　（私立城北高校教諭）
　　仁平　正男　（東京都立八王子東高校教諭）
　　蒲生真紗雄　（東京都立武蔵高校教諭）
　　尾澤　弘恒　（東京都立荻窪高校教諭）
　　穂坂　明徳　（神奈川県立平安高校教諭）
　　田中　雅文　（三井情報開発研究員）
　　前田　一美　（日本医療福祉専門学院専任講師）
　　小島　弘道　（筑波大学助教授）
　　植木　陽子　（東京学芸大学大学院生）
　　小沼　克年　（東京大学大学院生）
　　相馬　久子　（東京大学大学院生）

本書の執筆担当

　　深谷　昌志
　　前田　一美
　　植木　陽子

第Ⅰ章 調査の要約とテーマ

1．調査の要約

① 母と子の関係(図20)

これから先、やや冷却化するかもしれないが、それでも、大筋では円滑だと思う。

② 母のイメージ(表8・9)

心が暖かく、思いやりがあるのが、母親についてのイメージである。

③ 身辺の自立(表13・14)

生活の身近なことを親にしてもらっている子が多い。

④ 母親との距離(表15・16)

数学や英語の力を除くと、子どもたちは母親の力を越えられそうにないと思っている。

⑤ 子どもの抱く父親像(表21)

仕事熱心でやる気があり、それと同時に心が暖かく思いやりがある。

⑥ 子ぼんのうの父親(図36・38)

子ぼんのうの父親は、父親としての自己像が明るく、家庭人としての満足感が高い。

⑦ 父親との関係(図43)

「やや」も含めると、「うまくいっている」親子が8割に達し、こうした傾向は過去はむろんのこと、今後も続くだろうという。

⑧　父親との間がうまくいっている子
(図44～47)

父との関係がうまくいっている子は父との会話量が多く、母子関係も円満で、そうした関係は、これから先も持続していくだろうという。

⑨　父親を越えられるか(表25)

社会的な父親を越えられたと思っている子どもは2割弱で、3割近い子は将来も越えにくいと思っている。

⑩　父を越えにくいタイプ(図52～54)

しっかりした父を持つか、父との間がうまくいっているか、いずれにせよ、父子の関係がスムーズだと父親を越えにくい。

—まとめ—

母と子との間はむろんのこと、父と子との間でも、仲むつまじい親子が多い。やる気があると同時に、心が暖かく、やさしい親がふえた。その結果、子どもたちは、そうした親に頼りきり、親に依存している。そして父、そして母が、子どもにとって模範的でありすぎるために、子どもたちは親を越えにくいと思っている。そのため、反抗の兆しがみられず、精神的な自立が遅れている。

現代の親たちは、人間として、そして、親として、成長する努力を重ねてきた。しかし、皮肉なことに、そうした親の成長が、子どもの自立を妨げている。それだけに、子どもを自立させるために、親としてどうあらねばならないのかを、真剣に考える必要を感じる。

2. テーマ設定

(1)仲むつまじい親子関係

このところ、親子関係がさまがわりを見せているような印象を受ける。いつまでたっても、親子の間がスムーズで、円満なのはよいのだが、高校生の子どもたちの姿があまりに子どもらしすぎる気がする。もちろん、子どもらしすぎる子が、高校を卒業してから、一足とびにおとなになるとは考えられない。その結果、大学生になっても、あたかも小学生の親子のような親と子の関係が存続する。

こうした親と子の姿は、親のサイドに、いつまでも、子どもを子どもとして扱おうとする過保護の態度がみられるのがひとつの要因となっていよう。それと同時に、子どもの方にも、親を信頼し、というと、言葉がきれいだが、実質上、親に甘える気持ちが強いのも否定できない。

親の立場から見ると、高校生になった子どもを小学生でもあるかのように扱う過保護の傾向が顕著である。そして、子どもの方から見ると、高校生にもなって、小学生のように親に甘える依存的な態度が目につく。そして、親と子のどちらの影響力が強いのかはともあれ、現象としては、仲むつまじい親子の姿が高校生をかかえる家庭に一般化している。

しかも、そうした仲のむつまじさが、母子だけでなく、父と子の間にも認められるように思える。一昔前まで、高校生は、第二次反抗期のまっただ中か、あるいは、反抗の終わりのころで母親との間はむろん、父親に対しても冷たい関係にあるのが通例であった。特に、父親は、社会的な権威を象徴しているので、父と子との葛藤は、闘いにも似た様相を呈していた。

しかし、そうした親と闘う子どもというとらえ方は、過去の遺物となり、現在では、すでにふれたように、おだやかで、平和な親子関係が支配的になりつつある。それはよいのだが、こうした環境の許に育つ子どもたち

の心の成長が気がかりである。体だけが大きくなっても、心は子どものままで、親、または、おとなに依存しきっている。そして、自立が遅れていくなどが、歪みの具体例であろう。

しかし、先まわりをして問題を指摘しすぎたかもしれない。親に依存しきった高校生が多いと述べてきたが、それは、一部の事例に限られ、一般化はできないのかもしれない。それだけに、まず、現在の高校生の親子関係がどうなのかをきちんととらえておく必要があろう。

そこで、巻末に付した調査票を用いて、高校生の親子関係の実態をとらえることにした。そうした中から、仮に、円満な親子関係があらわれてくるのだとしたら、その問題点も洗い出していくことにしたい。

(2)サンプルの概要

本調査は、高校生を持つ父親、母親のそれぞれに答えてもらうものと、高校生自身に答えてもらうものとの三部構成となっている。

サンプル総数は、高校生1,578名、父親・母親それぞれ1,161名である。高校生のサンプルの内訳は、**表1**に掲げた通りである。

調査の実施は、昭和59年3～5月にそれぞれ学校経由の形をとった。

対象となった母親の年齢構成は**図1**に掲げた通り40歳から50歳までが8割以上を占めている。**図2**は、母親の仕事や学歴に関するデータだが、6割の母親がパートをはじめ何らかの仕事を持っており、学歴においても高卒以上が約9割を占めている。したがって、現代の40代の母親の標準的なサンプルであるといえよう。父親の仕事環境をみてみると、**図3**、**表2**から父親は、毎日だいたい30分から1時間半かけて通勤しており、平日の帰宅時間（**表3**）は6割程度が決まっているようである。

子どもの数（**図4**）も2人が60%、3人が25%と標準的な数であるといえよう。その子どもたちの年齢構成をみると、**図5－A**第一子の年齢、**図5－B**、いちばん下の子どもの年齢からわかるようにほぼ青年期にあたる子どもたちのいる家庭が想像できる。

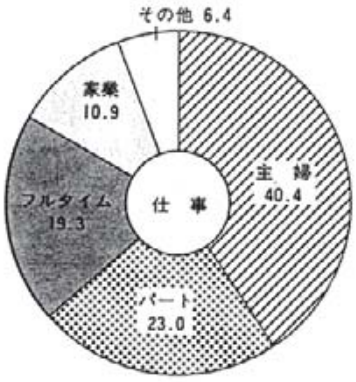
表1　高校生のサンプル数

（人）

	男　子	女　子	全　体
1　年	429	101	530
2　年	670	378	1,048
全　体	1,099	479	1,578

図1　母親の年齢

図２　母親の仕事・学歴



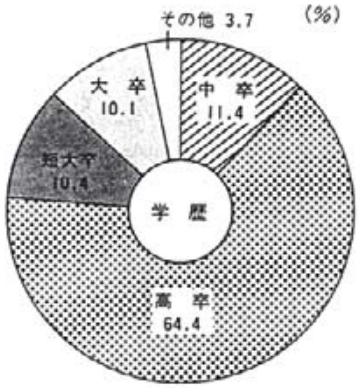


図３　父親の仕事場

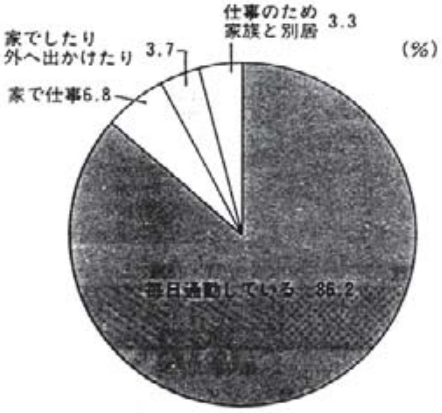


表２　父親の通勤時間

(%)

0　分	−30分	−60分	−１時間半	１時間半以上
8.2	30.1	30.5	23.7	7.5

表3　父親の平日の帰宅時間

(%)

決まっている			決まっていない	
毎　日	だいたい	まあ	あまり	まったく
9.4	32.0	22.7	25.1	10.8
64.1			35.9	

図4　子どもの数

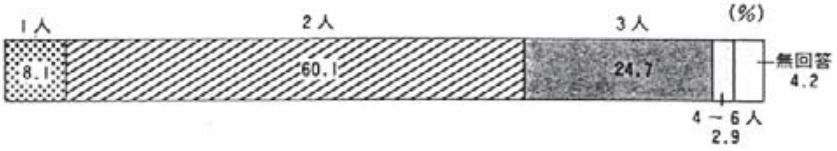
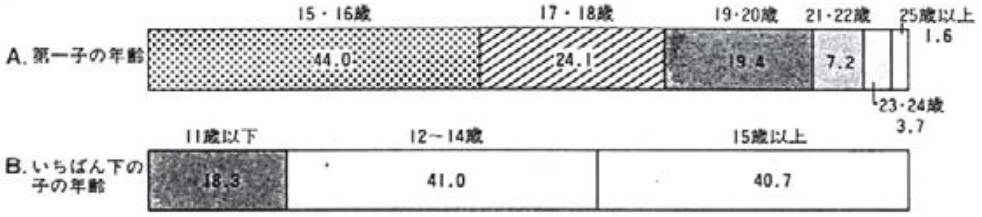


図5　子どもの年齢



第II章 母と子の関係を中心に

1．高校生を持つ母親

(1)高校生の親子関係

幼児期や児童期は、生活に必要なことのすべてを親に頼り、親のいいつけを守り、家族の習慣や規範、考えなどを、子どもなりに内在化する〝親への依存と服従〟の時代にあたっている。それが青年期にはいると、親への全面的依存から次第に脱却し、家庭以外の場で自己を生かし、独立した生活を獲得しようと努力する時期へと変化してくる。そうした変化に対応して、当然のことであるが、このおとなへの過渡期にいる子どもを持つ親たちは、その子どもへの接し方を変えていかなければならないであろう。

そこで高校生に、「高校生になって、両親が以前と比べて変わったところがありますか」という質問で、10項目について答えてもらうことにした。その結果が図6である。「とても・わりとそうなった」を合わせた数値が多い項目をみると、「責任をもたせることが多くなった」、「信頼してくれるようになった」など、子どもの自主性を認めるというような望ましい態度変化をしている親たちが上位を占めているのがわかる。しかし、詳しく数値をみるといずれも50%を下まわっており、親が子どもから目を離せないでいる状態、またそのような態度をとらせてしまう高校生の姿が、どこかにかくされているようにみえる。

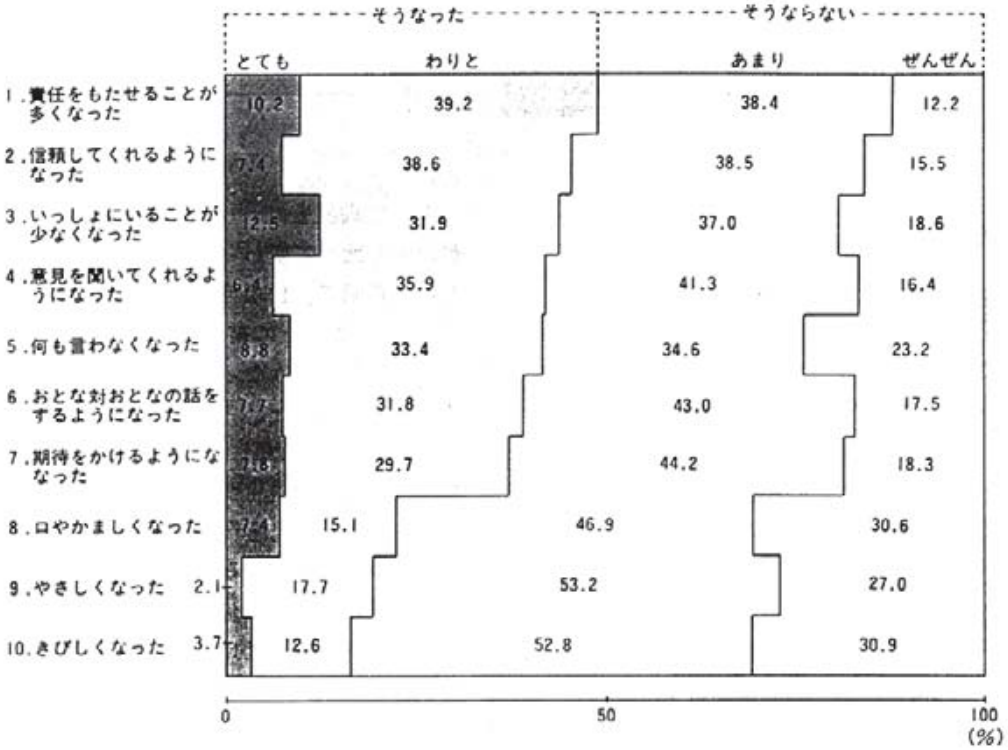
このように高校生の親たちは、小中学生時代に比べて、接し方に大きな変化はないようであるが、家族の中ではもっとも社会化のモデルとなるといわれる父親との関係を、子どもの社会化という観点からみたときを子どもの年齢を追って尋ねてみよう(図7)。子どもの父親に対する態度は、三つの段階を通るといわれる。まず第一段階は、母親から分離された存在として父親の存在を認めることであり、次いで第二段階として、子どもの目に父親の絶対的優越性がうつり始め、父親が権威ある存在として思える時期、そして中高校生になるとそれまでの無邪気な関係はくずされ、親は絶対的敬愛の対象から反抗の対象へと変化していくという経過をたどる。そして、そうした軌跡は子どもの発達の正常なプロセスであり、つきつめていうと親やおとなの権威を受け入れ、その後拒否することを通して独立を達成しようとする過程である。それらを考えると、図7の「中学生のころ」「現在」「高校を卒業するころ」父親との関係がうまくいっていないとする割合が高くはなっているが、それでもその割合は2割を下まわっており、半数近い生徒が、父親との関係が「とても・かなりうまくいっている」と答えている。さらに図8は、現在の母親との関係を示したが、「とても・かなりうまくいっている」が6割近くに達し、まだまだ母親とも寄り添っている感じが残る。

なお母親とのコミュニケーションをとるための会話量を尋ねたものが図9である。一目でわかるように、母親とは7割近くの子どもたちが「よく話をしている」そして「ときどき」を含めると9割以上に達する。つまり、母と子のコミュニケーションは円滑で、ここからは反抗期の兆しを見いだしにくい感じすらしてくる。

そこで父親や母親への気持ちを、形を変えて尋ねることにした。「結婚して親になったとしたら、自分の父親（母親）のようになり

図6　高校生になって、両親が変わったところ

——少しは責任を持たせてくれる——



たいか」（図10）では、「とても・わりとなりたい」37%、「どちらともいえない」35%、「あまり・絶対なりたくない」28%のように、生徒たちの反応は三分され、両親に批判的な見方をとる者が少なくないことが明らかになった。また図11「生まれ変わるとしたら、もう一度、自分の家の子として生まれたいか」で、家庭に対しても図10と同様の結果が出されており、これから先、視野をできるだけ広げ、その中で自分の親、家庭を客観視しようとする態度が育ち始めたのが感じられる。そうした意味では、かつてほど激しいものでなくとも、ゆるやかな形で現代なりの反抗期が生じているのかもしれない。

図7　父親との関係の変化

――お父さんとの間はうまくいっている――

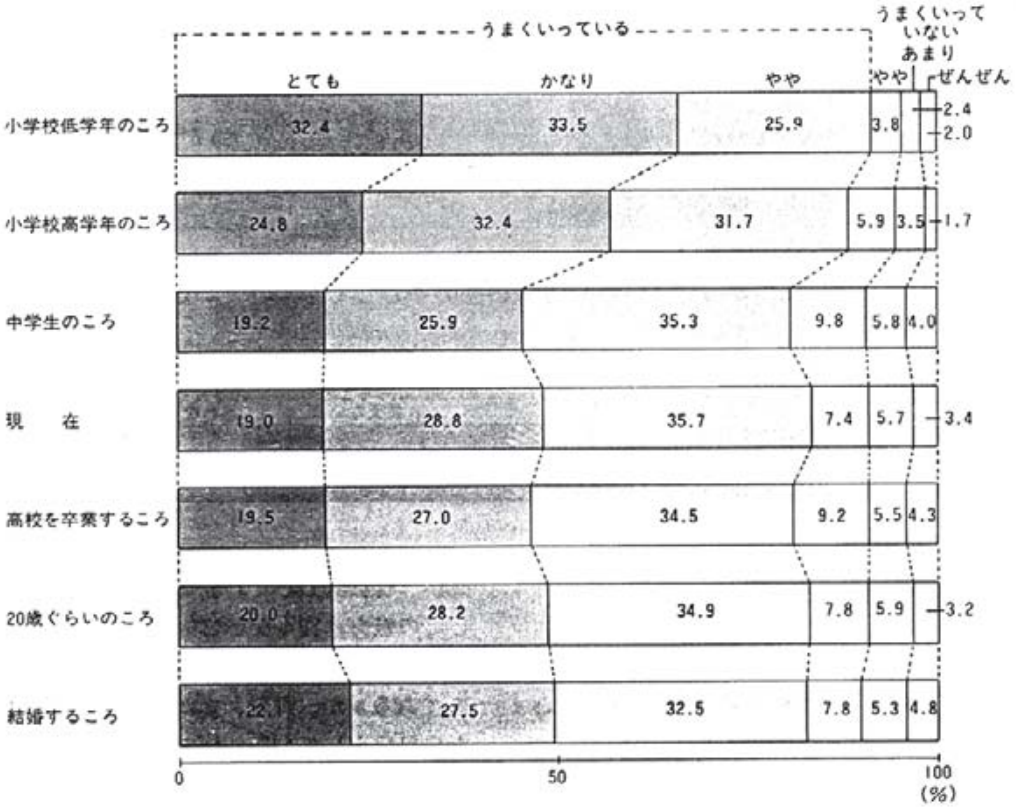


図8　母親との関係

――うまくいっているのが大半――

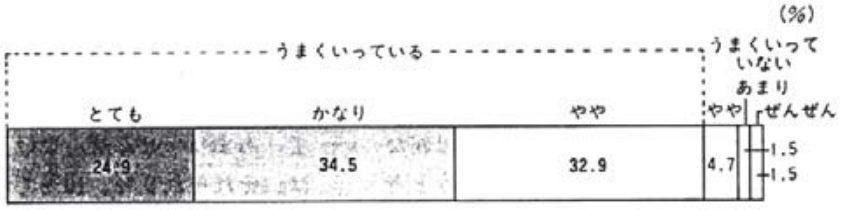


図9　父母との会話

——わりと話している——

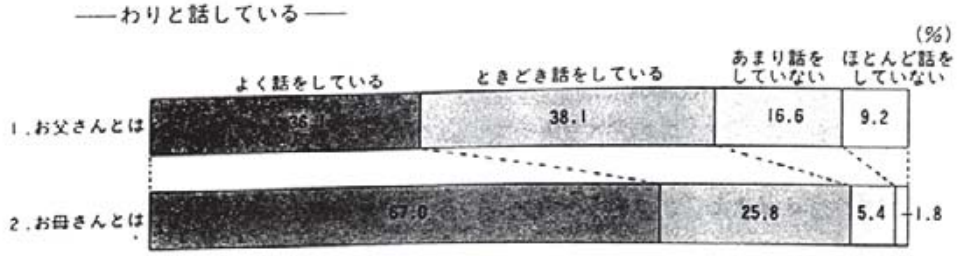


図10　父親(母親)のようになりたいか

——お父さんのような父親になりたい——

(女子はお母さんのような母親に)

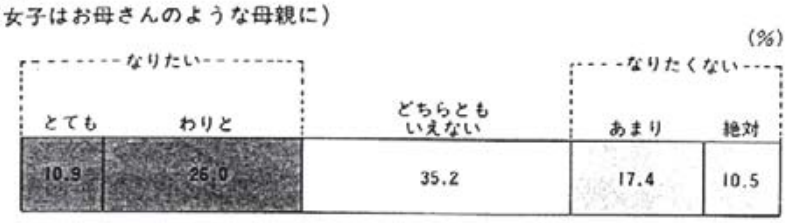
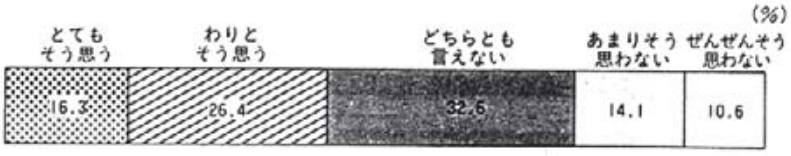


図11　もし生まれ変わるとしたら、自分の家の子として生まれたいか

——決していやではない——



(2)母親の自己像

ここで親子関係から少し離れて、母親の自己評価、および夫に対する考え方についてふれてみたい。

考え方にもよろうが、よい母親であるためには、母親である前に人間として、女性として、あらゆることに自信を持って自分の人生を生きていることが第一の条件のように思われる。そこで高校生の母親に「服装のセンス・女性としての魅力」など7項目について、子どもからどう評価されていると思うかを尋ねてみた。その結果を図12に示した。母親たちが、子どもから高い評価を得るだろうと考えているのは「子どもへの愛情」64%だけで、その他の6項目については、「生活態度」41%、「社会人としての教養」32%、「女性としての魅力」12%など自信のなさが目につく。それでは、主婦としての自信のほどはどうなのであろうか。母親、または妻としての自分を自己採点してもらったのが表4である。全体的に「ふつうぐらい」に半数が集中しており、特に「服を作る腕前」については、「あまり・ぜんぜんない」42%と自信がない。手作り指向が高い昨今であるが、洋服となってはデザインや流行にうるさいためか、こうした面に自信を持つのはなかなか難しいのであろう。「子どものしつけ」、「子どもの教育」で「あまり・ぜんぜんない」と答えているのは、それぞれ9%、10%で他の項目よりわずかではあるが、低い数値を示している。したがって母親たちは、家計のきりもりやそうじ、

料理をする妻としてより、子どもの母親としての方に自信を持っているようにみえる。

さらに表5では「用事で3日間、また、1週間家をあけたとすると、残った家族は、どの程度困るか」と具体的条件を設定して判断してもらった。「毎日の食事の仕たく」から「子どもの勉強に気を配る」まで11項目について、「3日間」の場合で、自分がいなくてとても困るだろうと思う順に並べてある。筆頭にあげられているのは、家事の中でも代表的な「食事の仕たく」と「そうじ・せんたく」である。そして第3位と第4位には、「家庭

図12　母親としての自己評価
——子どもへの愛情はあるつもり——

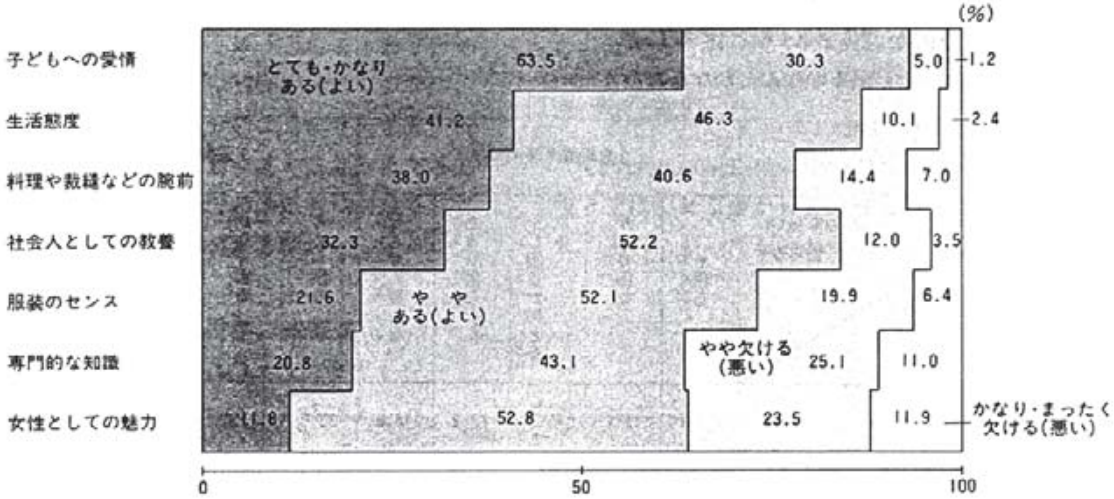


表4　主婦としての自己採点
——ふつうぐらいなら——

(%)

順位	項目＼尺度	とてもある	かなりある	ふつうぐらい	あまりない	ぜんぜんない
1	家計のきりもり	11.0	26.3	47.9	13.1	1.7
		37.3			14.8	
2	子どものしつけ	5.2	25.4	60.5	8.2	0.7
		30.6			8.9	
3	そうじの腕前	8.6	24.4	52.1	13.8	1.1
		33.0			14.9	
4	料理の腕前	5.7	24.6	54.9	13.5	1.3
		30.3			14.8	
5	子どもの教育	4.2	22.4	63.4	8.8	1.2
		26.6			10.0	
6	服を作る腕前	7.5	17.2	33.0	30.1	12.2
		24.7			42.3	

の中がさびしくなる」、「お客さまやおつきあい」と対人関係に関する項目が続いている。下位の方には、「子どもの着るものの世話」、「子どもの話し相手」、「子どもの勉強に気を配る」など子どもに対する項目が位置している。サンプルの概要の項で述べたように、本調査対象となった家庭は、いちばん下の子が中学生以上というのが8割(図5－B)を占めるので、3日間ぐらい母親が不在でもなんとかなるだろう、と判断しているのであろう。

これが1週間に延長されるとどうであろうか。当然であるが、全体的に「とても・かなり困る」割合が高くなる。そして上位の項目では「とても困る」割合が2倍に増加している。こうしてみると、母親が3日程度であれば家をあけてもなんとかやっていくが、1週間ともなると、家の中は混乱をきたし、高校生の子どもであっても、その穴うめはできそうもないというのであろう。

では、このように家庭ではなくてはならな

表5　母親が家をあけると困ること
――少し困るがなんとかなるだろう――

(%)

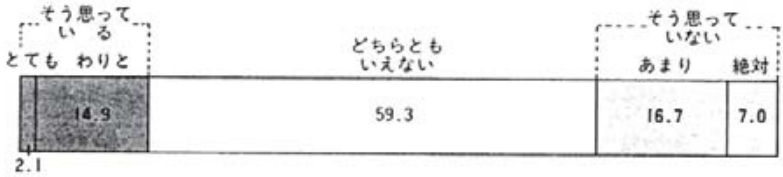
項目＼どのくらい困るか	3日間家をあけると					1週間家をあけると				
	とても困る	かなり困る	少し困るが何とかなる	あまり困らない	ぜんぜん困らない	とても困る	かなり困る	少し困るが何とかなる	あまり困らない	ぜんぜん困らない
毎日の食事の仕たく	16.3	19.8	(45.1)	13.2	5.6	(33.0)	29.0	27.8	6.4	3.8
そうじ、洗たくなどの家の雑用の処理	15.4	23.3	(41.5)	14.5	5.3	(30.5)	(30.5)	28.8	6.2	4.0
家庭の中がさびしくなる	13.2	21.2	(42.6)	15.7	7.3	21.0	27.2	(36.0)	11.1	4.7
家に来るお客さまやおつきあい	7.1	12.5	(38.7)	29.8	11.9	10.9	16.9	(38.4)	23.4	10.4
夫の仕事(商売など)を助ける人がいなくなる	6.3	6.9	14.0	26.5	(46.3)	9.8	8.9	16.9	23.4	(41.0)
動物や植物の世話、手入れ	6.0	10.2	26.9	(29.3)	27.6	12.2	15.3	(27.5)	22.1	22.9
子どもの着るものの世話	4.4	7.3	(32.2)	28.7	27.4	12.2	17.5	(31.8)	19.4	19.1
夫の着るものの世話	3.6	6.2	(39.7)	30.7	19.8	13.7	24.0	(35.5)	16.1	10.7
子どもの話し相手がいなくなる	3.0	8.8	(35.2)	33.5	19.5	8.3	20.5	(34.3)	24.8	12.1
お金の使い方がずさんになる	2.2	4.4	16.6	34.0	(42.8)	4.0	9.9	20.5	31.4	(34.2)
子どもの勉強に気を配ってやる人がいなくなる	2.1	5.4	20.5	35.2	(36.8)	4.9	10.2	26.4	(30.2)	28.3

◯は最頻値

図13　母親のようになりたいか(母親のような人と結婚したいか)

——どちらともいえない——

(%)



い重要な役割を占める母親であるが、「自分の子どもが将来自分のような母親になろう（自分のような人と結婚したい)と思っているか」を尋ねると図13のように「とても・わりとそう思っている」割合は17%と非常に少ない。自分の子どもは、自分のように「あまり・絶対なりたくない」と思っているだろうと答えた母親は24%で、自分の子どもに否定されていると思っている母親が2割以上もいるのは、悲しい思いのするデータである。そして残りの59%も「どちらともいえない」と答えている。このタイプの親も、自信を持って、子どもの気持ちをおしはかれないのであろう。

(3)夫の条件

もう少し母親自身について尋ねてみると、表6では、結婚前から20年後まで、現在、過去、未来に渡ってしあわせの度合が微妙に変

表6　過去、現在、未来のしあわせ度

——まあしあわせだと思う——

(%)

項目＼尺度	とてもしあわせ	かなりしあわせ	まあしあわせ	はんぶんはんぶん	まあふしあわせ	かなりふしあわせ	とてもふしあわせ
結婚前	17.2	22.2	38.7	16.3	3.1	1.9	0.6
	39.4				5.6		
結婚直後	18.0	25.8	37.1	14.5	2.5	1.1	1.0
	43.8				4.6		
第一子が生まれたころ	24.3	26.7	35.2	9.9	2.2	1.2	0.5
	51.0				3.9		
第一子が幼稚園のころ	20.7	27.4	38.3	10.2	1.5	1.1	0.8
	48.1				3.4		
第一子が小学校入学のころ	20.7	26.9	39.1	9.6	1.8	1.2	0.7
	47.6				3.7		
第一子が中学校入学のころ	18.9	27.7	39.3	10.5	1.6	1.0	1.0
	46.6				3.6		
現在	21.5	25.6	38.0	11.3	1.4	1.2	1.0
	47.1				3.6		
5年後	14.2	24.6	43.8	15.3	0.7	0.8	0.6
	38.8				2.1		
10年後	15.3	23.7	43.6	15.1	0.5	1.2	0.6
	39.0				2.3		
20年後	15.7	22.0	39.4	19.6	1.2	0.9	1.2
	37.7				3.3		

化していることがわかる。第一子が生まれた頃が幸せの絶頂期、(と言っても「とても・かなり」を合わせて51%であるが)であり、それを境に過去へもどるほど、また未来へ行くほどしあわせ度は少なくなっている。家庭をもつ主婦にとって「しあわせかどうか」は、その人生のパートナーである夫との関係が大きいのではないかと思われる。そこで「あなたのご主人が若い青年として、また、若いあなたの前に現れたとします。あなたはその青年と結婚してもよいと思いますか。」(図14)と尋ねてみると「ぜひ・できれば」が40%で、まあしてもよい」を含めると80%となる。しかし、「絶対・できればしたくない」と避ける人が20%、とちょっぴり夫に満足していない人たちの姿も目につく。そこで、夫との結婚を望む人とそうでない人と表6でみた、しあわせ度で比較したのが図15である。「もう一度夫と結婚したい」と思う人たちは、結婚前から20年後まで常に8割以上のしあわせ感を持っており、「今の夫とは結婚したくない」という人のしあわせ感をひき離している。このことから、主婦として、母親としてしあわせな一生を送るには、夫への満足感が非常に影響することがわかる。そこで夫の条件を8つあげ、すでに結婚して15年以上たっている高校生の母親たちは、どのような男性を理想の夫として好むのかを、次のような条件を「大事に考えるか、考えないか」の形で答えてもらうことにした。表7、図16、をみてわかるように、上位の2つとして「健康」と「やさしさ」があげられている。これらはごく平凡のように見えてもほとんどの女性が望むとされている条件であろう。そうした中で注目したいのはその次に大事としている「たくましさ」「金銭的豊かさ」である。「とても・かなり」の数値は上位の2項目には及ばないものの、「まあ・あまり・ぜんぜん考えない」数値は、それ以下の「性的魅力」「学歴」「家柄」「ハンサムぶり」に比べて少ない。言いかえれば、現在社会を支える中堅層の夫をもつ妻として、また、多様化された社会で子どもたちに満足のいく教育を受けさせたいと思う母親として「たくましさ」と「経済力」は必要欠くべからざる条件となるのであろう。このように夫には健康でやさしい人を望む母親たちであるが、「もう一度生まれ変わるとしたら」(図17)「女性」、と自らを受け入れられている人が55%、男性への生まれ変わりを希望する人よりもやや多い。性役割の受け入れ方は、その人の人生観、幸福観に左右されるものなのであろうが、現代の日本では、女性の社会的地位も向上し男性との不当な差別も厳禁とされてきていることも影響しているだろう。ところで生まれ変わった女性は、どんな人生を希望しているだろうか。図18の女性の生き方では、5つの選択肢を設けておいたが、それぞれ専業主婦志向、職業志向に分かれ、女性の生き方の多様化がはっきりと出てきたような印象を受ける。なお生まれ変わりばかりを追うのはやめ、今後の生き方として職業希望をきいてみた(図19)。現在の職業(図2)では、「パート23%」「主婦40%強」「フルタイム19%」であったが、ここでは、それぞれパートで15%、フルタイムで5%増えており、40歳代の主婦たちは、子育てからも解放され、子どもたちもそれぞれの道を歩き始めたところで何か仕事を、と望んでいる姿が現れてきている。

図14　もう一度ご主人と結婚してもよいか

――したくないが２割――

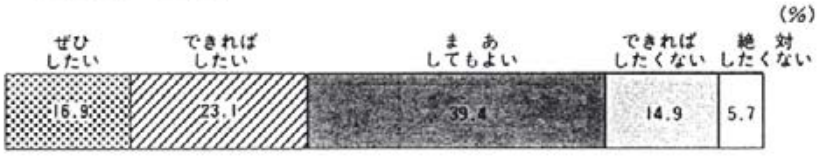


図15　しあわせ度×もう一度夫と結婚

――しあわせは夫によって？――

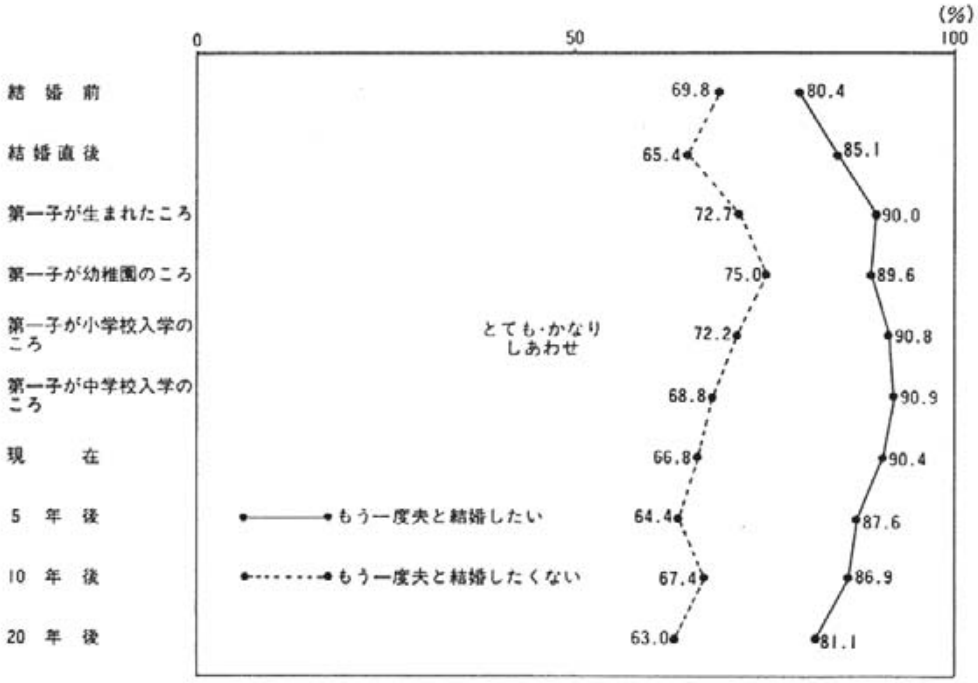


表7　夫の条件

——健康、そしてやさしさ——

(%)

項目＼尺度	とても	かなり	ま あ	はんぶん	ま あ	あまり	ぜんぜん
	大事に考える		大事に考える	はんぶん	考えない		
体の健康	71.0	20.1	6.9	1.3	0.3	0.4	0
	91.1				0.7		
人柄のやさしさ	56.8	28.0	11.3	3.2	0.2	0.3	0.2
	84.8				0.7		
たくましさ	37.0	28.9	21.5	9.4	1.8	1.1	0.3
	65.9				3.2		
金銭的な豊かさ	14.6	23.6	36.3	21.0	2.0	1.9	0.6
	38.2				4.5		
性的な魅力に富む	6.6	8.2	26.5	35.7	11.2	9.1	2.7
	14.8				23.0		
良い大学を卒業した	3.4	10.0	25.0	29.2	12.0	14.2	6.2
	13.4				32.4		
家柄のよさ	4.0	5.5	22.3	30.9	13.3	17.3	6.7
	9.5				37.3		
ハンサムぶり	3.6	4.3	19.3	44.1	12.3	13.4	3.0
	7.9				28.7		

図16　夫の条件

——とても、かなり大事に考える——

(%)

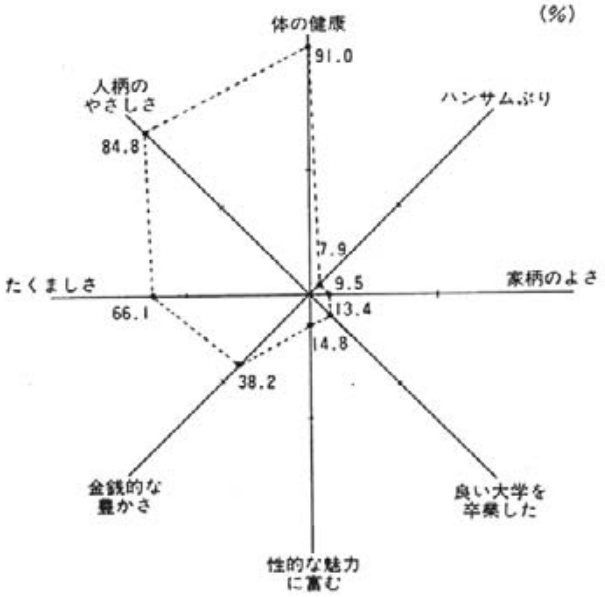
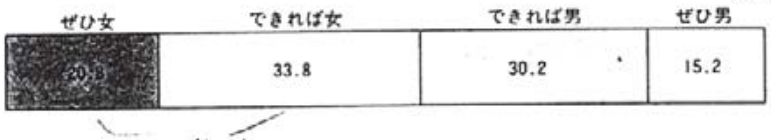


図17　もう一度生まれ変わるとしたら

(%)



54.6

図18　もう一度人生をやり直すことができたら
——女性の生き方——

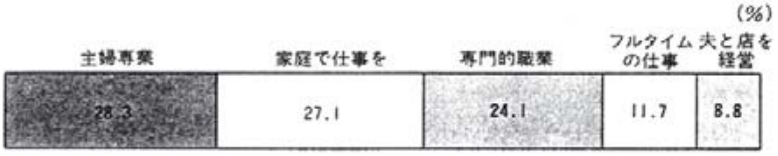
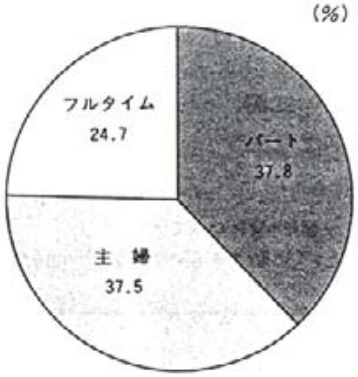


図19　主婦の今後の職業希望



2. 母と子との距離

(1)母とのコミュニケーション

青年にとって、反抗はつきものだといわれる。そこでまず、伝統的な意味での青年と反抗との関係にふれておこう。

青年期のまっただ中にいる高校生は、依存から独立への移行の過程でしばしば家族を批判し、ときには反抗する。青年の自我が形成されてくるのに伴ない、彼らの批判や反抗はまずもっとも身近で、社会的禁止の少ない家族の中で生じ、そのエネルギーが、まず親に向けられることが多い。したがって青年の親への反抗や離反は、幼・児童期での親への愛着への反動であり、親を理想視、絶対視していたことからの目ざめである。そういった意味から親との対立は、青年にとっての一つの進歩と言わねばならないであろう。

そこで、子どもといちばん多く接している母親に、子どもとの間がこれから先、うまくいきそうと思えるかどうか、子どもが小学校低学年のころにさかのぼって、そこから将来結婚するころまでを想定して答えてもらった。それが図20である。「とても・かなりうまくいっていた（いる・いくだろう）」割合は、小学校低学年のころの86%をピークとして、だんだんに減っていき、結婚するころに至っては59%に低下している。しかし、おもしろいことに中学生のころより、また高校を卒業するころより、現在の方（71%）が、それぞれわずかずつではあるがうまくいっている割合

が高い。全体のグラフの傾きからいくと、65%ぐらいを示してよいはずなのに、ここで数値が高くなっているのは、何か意味があるのだろうか。

母親の中には、「うちの子は学校から帰って来ても何もしゃべってくれない」と嘆く声

図20　子どもとの関係

――これまでだいたいうまくいっていた――

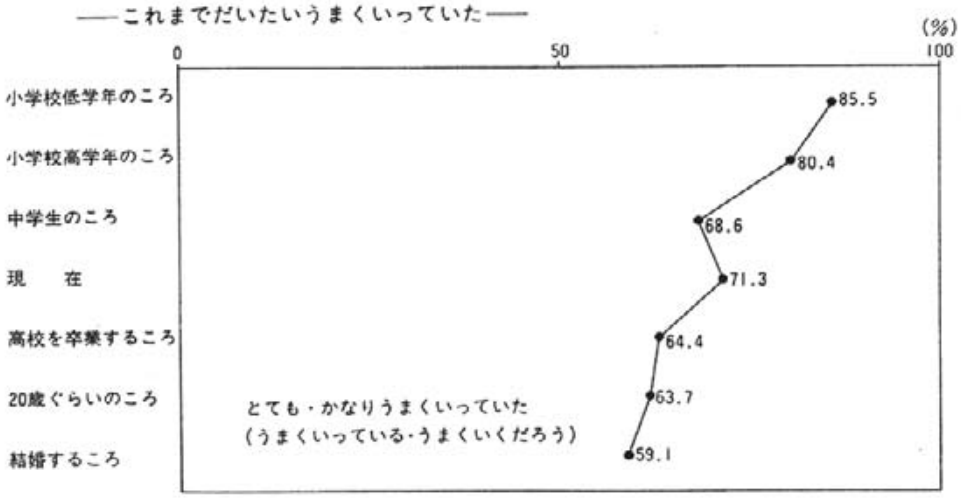
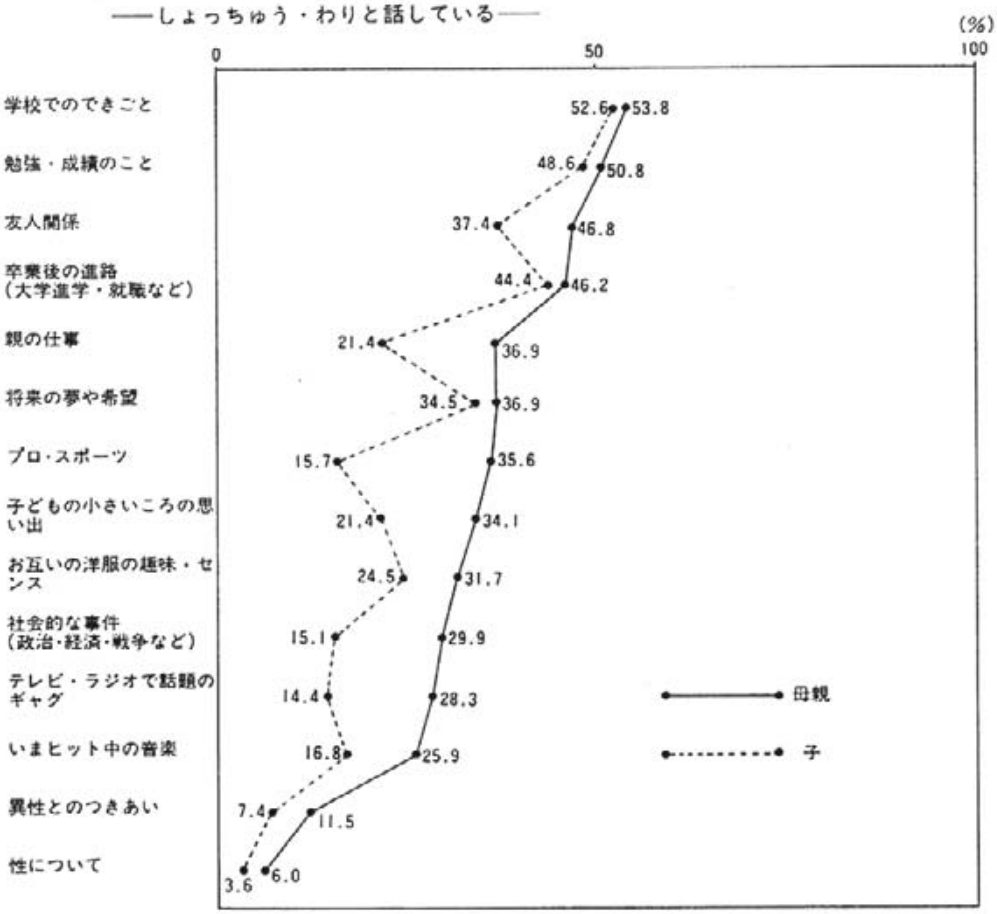


図21　母子の話題

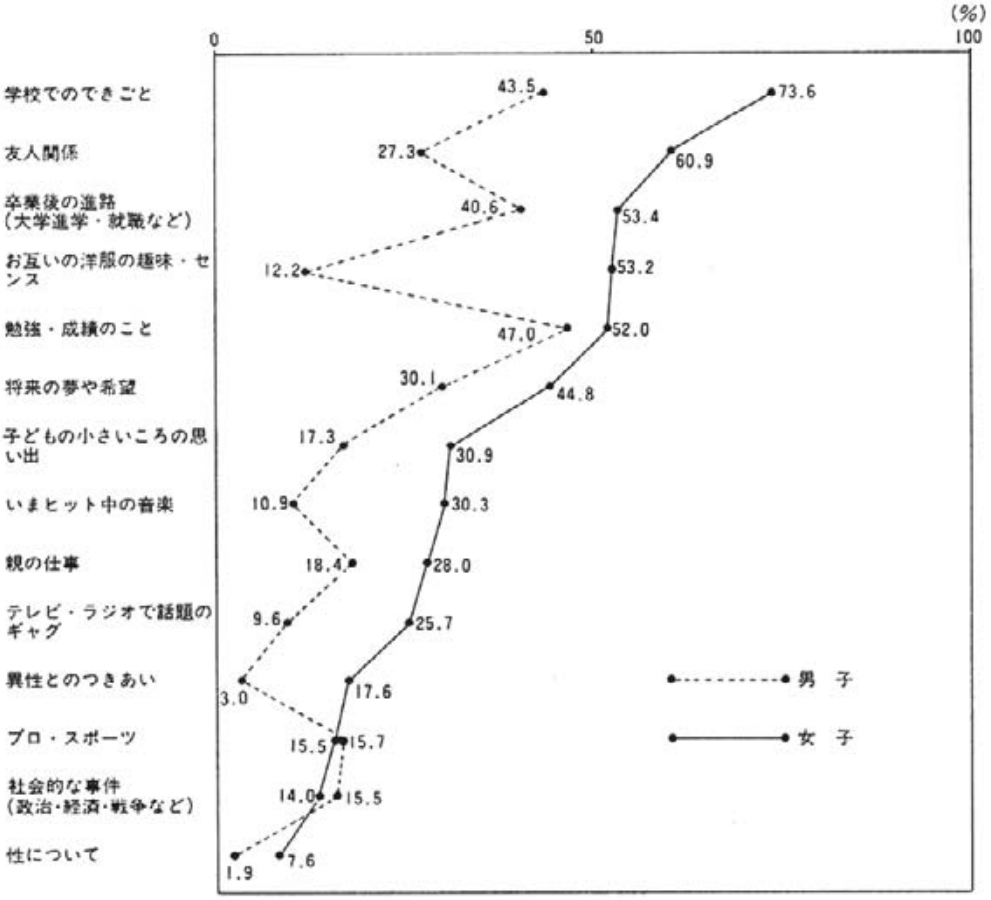
――しょっちゅう・わりと話している――



が聞かれる。高校生たちは母親といったいどんな話をしているのだろうか（図21）。「学校でのできごと」から「性について」まで、子どもと母親に同じ項目で尋ね、母親が「しょっちゅう・わりと話している」と答えた順に並べてある。全体に母親の方が「話している」と答えている割合が高いが、上位4項目のうち3項目は「学校でのできごと」、「勉強・成績のこと」、「卒業後の進路」と、どちらかと言えば親の方から口出しをし、会話というよりは意見をしたくなる話題があがっている。「友人関係」、「親の仕事」、「プロ・スポーツ」などは、母親は子どもと話していると思っているらしいが、親が思っているほど子どもの側では話題にしていないと思っている。これは家庭にとじこもりがちな母親と比べ、子どもは友だちとの会話の中で、そうした話をする機会が多い。そうした差から生ずる開きなのであろう。「社会的な事件」以下では母親の方も3割を割っている。最下位の「性について」は母子ともども1割に充たない。たしかに、性については、マスコミで過大に取り上げられ、母親の子ども時代に比べれば話題にしやすくなっているものの、まだまだ母子がしょっちゅう話す内容にはなっていないように思える。

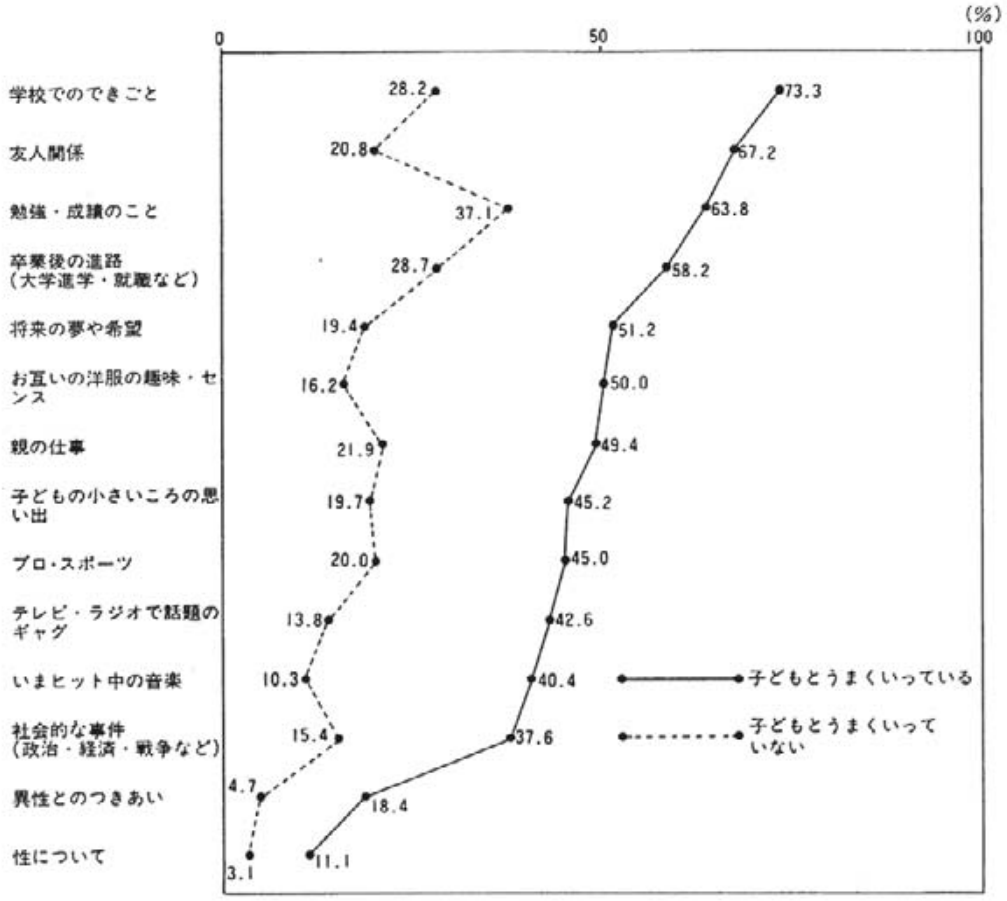
図22では、図21と同じ質問を子どもの性別で表してみた。最上位と最下位は変わらない

図22　母子の話題（子どもの性別による）
——しょっちゅう・わりと話している——



が、男子と女子では、母親との話題もずいぶん違っており、特に娘と母親との間で、学校でのできごとなどをしゃべり合う姿が浮かんでくる。ところで、図20で、「現在」がその前後に比べて、子どもとうまくいっていると判断する母親が多いという傾向が得られているが、図23で、これまでふれた母子の話題を素材にして、その背景をさぐってみよう。本調査は高校1・2年生とその親たちを対象にしたものであるが、図23の上位にあがっている項目をみてみると、「学校」、「勉強・成績」、「進路」と高校時代の過ごし方によっては、一生を左右される可能性の強い事柄について話している。中学時代はそれほど重きを置かず、親の意見に反抗してきた子どもたちも、高校生になっては反抗してなどいられず、上位にある内容については、お互いに意識しながらかかわっているのかもしれない。それとも、子どもたちが心の面で成熟して、親の意見をおとなの判断として聞き入れるようになったのであろうか。

図23　子どもとうまくいっている×母子の話題(しょっちゅう・わりと話す)
——うまくいっているとよく話す——



(2) 母親のイメージ

こう見てくると、高校生の母子関係が、円滑で、むしろ幼くなっているような印象を受ける。そこで母子関係の変化をとらえるために、これら高校生がみた母親像、高校生にとって祖母にあたる母親像を母親自身に尋ねて（表8・9・10）、三世代の比較を行なうことにした。まず高校生の抱く母親像は、項目の順位に多少の違いはあるが、「絶対・まあ[A]」、「絶対・まあ[B]」を合わせた数値そのものには差がなく、「心が暖かくて、思いやりがあり、仕事熱心でやる気のある」母親像が浮かび上がってくる。高校生の抱く母親像としてはちょっと甘えの感じがしないでもない。表9、10の「絶対・まあ[A]」だけをとり出して母親自身と一世代前の母親像と比べたのが図24である。数値に逆転が見られるのは、下

表8　子どもにとっての母親像

——暖かく、思いやりがある——

(%)

[A]	絶対	まあ	まあ	絶対	[B]
	[A]		[B]		
心が暖かい	28.9	62.3	8.1	0.7	心が冷たい
	91.2		8.8		
思いやりがある	30.4	59.5	8.5	1.6	自分勝手
	89.9		10.1		
仕事熱心	39.5	50.2	9.1	1.2	なまけもの
	89.7		10.3		
やる気がある	30.0	59.7	9.8	0.5	やる気がない
	89.7		10.3		
頼りになる	23.3	58.0	16.9	1.8	頼りない
	81.3		18.7		
やさしい	25.1	55.7	16.9	2.3	きびしい
	80.8		19.2		
尊敬できる	24.9	55.5	17.1	2.5	けいべつしたい
	80.4		19.6		
教育熱心	23.9	51.3	21.3	3.5	無関心
	75.2		24.8		
健康的	23.3	51.1	21.8	3.8	体が弱い
	74.4		25.6		
デリケート	14.0	56.0	26.1	3.9	無神経
	70.0		30.0		
ロうるさい	23.9	42.3	27.4	6.4	放任的
	66.2		33.8		
スポーツ好き	10.9	34.9	41.7	12.5	スポーツ嫌い
	45.8		54.2		

位の「教育熱心」、「デリケート」、「口うるさい」、「スポーツ好き」で、どれも現代の母親を象徴する言葉であるように思われ、世代差というより、時代背景の差なのかもしれない。

このように現代の母親ほど教育的な関心は強いものの、それでも親子関係はむしろ予想以上に円滑であった。そこで図20でみた「子どもとうまくいっている」の結果に注目して、母子関係がうまくいっているかどうかと母親像の関係を調べてみた(図25)。それによると、うまくいっている母子とそうでない母子で、母親像について20%以上の差のあるものは、「思いやりがある」、「やさしい」、「尊敬できる」で、中でも「尊敬できる」については30%近くの開きが認められる。高校生の子どもとうまくやっていくためには、(青年期にあたる子どもに対して難しいことかもしれないが、)親が人間として子どもから尊敬される存在であることが不可欠なのであろう。

それでは母親像とは逆に、子どもの姿はど

表9　母親自身の母親像(自己像)

——心が暖かくやる気があるつもり——

(%)

A	絶対	まあ	まあ	絶対	B
	A		B		
仕事熱心	35.1	54.2	10.2	0.5	なまけもの
	89.3		10.7		
心が暖かい	24.9	63.5	11.0	0.6	心が冷たい
	88.4		11.6		
やる気がある	29.3	58.5	11.8	0.4	やる気がない
	87.8		12.2		
思いやりがある	26.3	59.5	13.0	1.2	自分勝手
	85.8		14.2		
健康的	25.0	57.2	14.4	3.4	体が弱い
	82.2		17.8		
頼りになる	19.5	62.3	16.7	1.5	頼りない
	81.8		18.2		
やさしい	16.3	56.2	24.6	2.9	きびしい
	72.5		27.5		
尊敬できる	10.0	62.5	26.7	0.8	けいべつしたい
	72.5		27.5		
教育熱心	12.4	58.7	26.8	2.1	無関心
	71.1		28.9		
デリケート	13.1	57.8	26.8	2.3	無神経
	70.9		29.1		
口うるさい	15.5	50.5	31.5	2.5	放任的
	66.0		34.0		
スポーツ好き	14.5	41.9	33.7	9.9	スポーツ嫌い
	56.4		43.6		

のように変化しているのであろうか。母親像と同じ手法で、子どもと母親に同じ項目を用い、子ども像を尋ねてみた。**表11、12**から「健康」、「友だちづきあい」、「性格」は両者に数値の差があるものの、第3位までは同じ項目が並んでいる。いろいろ言えばきりがないが、健康でまあまあの性格で友だちづきあいのよい子が多いのであろう。しかし「数学・英語の成績」では、子どもは母親に「性格」の次に評価されていると思っているものの、母親からは評価がきびしく、下位の2項目になっている。表11、12をまとめて見やすくしたものが**図26**だが、親の評価が、すべての項目で子どもを上まわっている。親は子どもにある程度のあきらめにも似た気持ちを抱き、それにしては良い子に育ったと思う。しかし、子どもは自分について、あきたりなさを感じており、特にそうした母と子の開きは性格面に認められる。子どもとしては、もっとよい性格の子になりたいと思っているのであろう。

表10　一世代前の母親像

——母親からみた——

(%)

A	絶対	まあ	まあ	絶対	B
	A		B		
仕事熱心	49.4	41.9	8.0	0.7	なまけもの
	91.3		8.7		
やる気がある	42.8	47.3	9.2	0.7	やる気がない
	90.1		9.9		
心が暖かい	38.9	51.1	9.4	0.6	心が冷たい
	90.0		10.0		
思いやりがある	38.8	50.4	10.0	0.8	自分勝手
	89.2		10.8		
尊敬できる	35.2	53.3	10.7	0.8	けいべつしたい
	88.5		11.5		
頼りになる	30.6	51.4	15.6	2.4	頼りない
	82.0		18.0		
やさしい	33.5	47.8	15.3	3.4	きびしい
	81.3		18.7		
健康的	29.3	48.6	16.4	5.7	体が弱い
	77.9		22.1		
デリケート	15.2	52.2	30.0	2.6	無神経
	67.4		32.6		
口うるさい	15.1	43.4	35.4	6.1	放任的
	58.5		41.5		
教育熱心	13.7	42.4	36.3	7.6	無関心
	56.1		43.9		
スポーツ好き	8.4	29.4	41.7	20.5	スポーツ嫌い
	37.8		62.2		

図24　母親像の世代差

――それほどは開きがない――

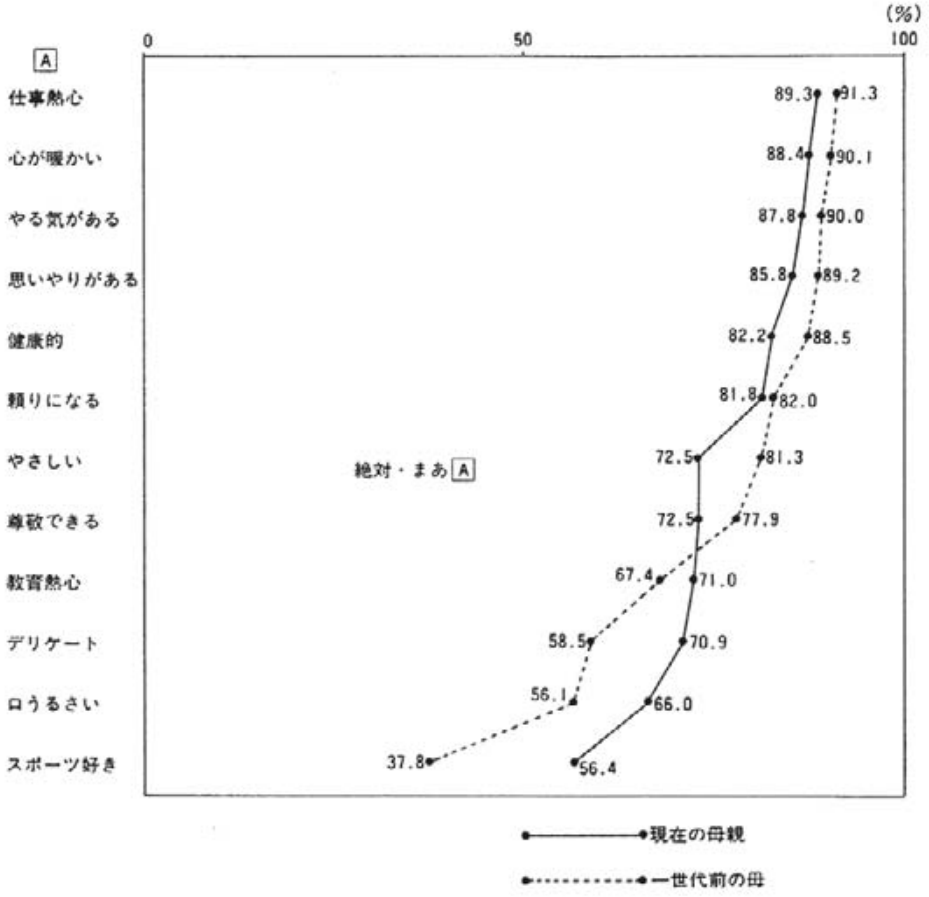


図25　子どもとうまくいっている×母親像

――うまくいっている母のイメージは明るい――

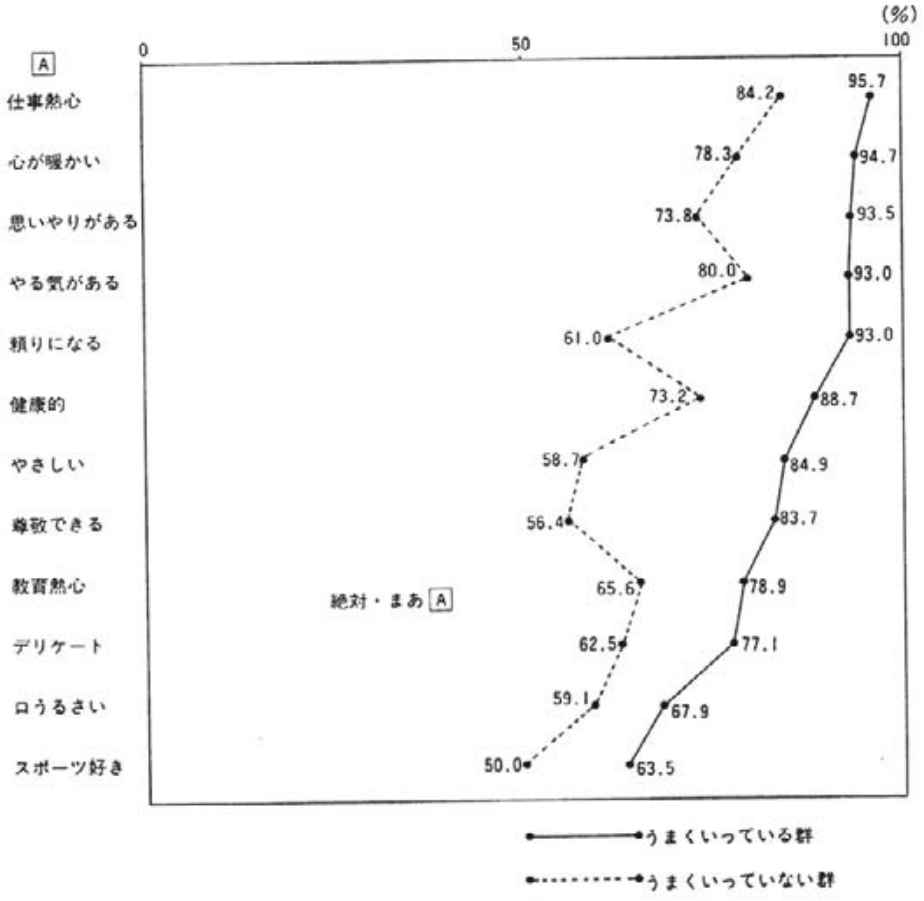


表11　母親からどう思われているか（子ども自身の評価）

——健康ぐらいしか評価してもらえそうにない——

（%）

項目＼尺度	とても	かなり	やや ある（よい）	やや 欠ける（悪い）	かなり	まったく
	ある（よい）				欠ける（悪い）	
健　康	24.5	26.8	26.3	16.4	4.1	1.9
	51.3				6.0	
友だちづきあい	17.8	28.5	38.4	10.7	2.3	2.3
	46.3				4.6	
性　格	9.0	19.9	42.6	20.6	4.4	3.5
	28.9				7.9	
数学の成績	7.3	13.9	27.1	23.7	14.7	13.3
	21.2				28.0	
英語の成績	6.4	14.2	29.4	23.6	15.3	11.1
	20.6				26.4	
生活態度	5.8	14.4	38.4	29.4	10.0	2.0
	20.2				12.0	
勉強に対する意欲	5.5	10.4	27.3	30.9	15.2	10.7
	15.9				25.9	
男性（女性）としての魅力	4.5	9.3	44.7	26.0	8.6	6.9
	13.8				15.5	

表12　母親からみた子どもの評価

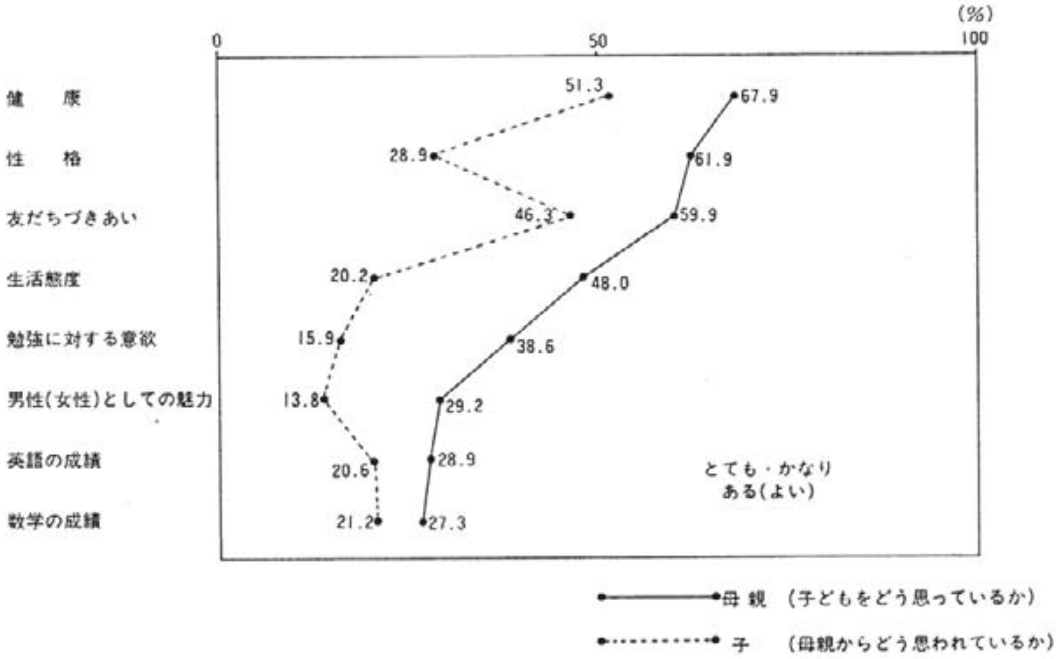
——全体としてもう一歩——

（%）

項目＼尺度	とても	かなり	やや ある（よい）	やや 欠ける（悪い）	かなり	まったく
	ある（よい）				欠ける（悪い）	
健　康	32.7	35.2	24.8	6.3	0.8	0.2
	67.9				1.0	
性　格	23.4	38.5	31.6	5.1	1.0	0.4
	61.9				1.4	
友だちづきあい	24.0	35.9	30.7	7.6	1.3	0.5
	59.9				1.8	
生活態度	14.9	33.1	37.0	12.6	1.7	0.7
	48.0				2.4	
勉強に対する意欲	11.7	26.9	32.1	21.5	5.2	2.6
	38.6				7.8	
男性（女性）としての魅力	6.8	22.4	51.6	15.6	2.7	0.9
	29.2				3.6	
英語の成績	8.4	20.5	32.2	21.0	12.4	5.5
	28.9				17.9	
数学の成績	8.4	18.9	32.9	23.5	9.8	6.5
	27.3				16.3	

図26　子どもの評価

——子どもの方が自信に欠ける——



3. 親への依存と自立

(1)身近な生活習慣

日本の親子関係の中では、子どものしつけが必ずしも効率よく行なわれず、そうした歪みがルールや規範意識の弱さとなってあらわれるといわれている。アメリカなどでは現在でも、子どもに対して、父親と母親が連携して、幼児期からしっかりとした信念を持ち、しつけをしたり注意を与えたりしているといわれる。しかし、日本の場合、親たちは子どもを

表13　身辺の自立(子ども自身)
——いつも親がしてくれる——

(%)

項目＼尺度	いつも親がしてくれる	ほとんど親だがたまに自分でする	ほとんど自分だがたまに親がしてくれる	いつも自分でする
運動着の洗たく	(77.4)	16.5	2.9	3.2
下着の洗たく	(74.3)	17.7	3.2	4.8
制服の手入れ(ボタンつけやほころび直しなど)	(47.8)	24.7	11.1	16.4
ふとんを干すこと	(37.6)	31.2	16.7	14.5
自分の食器のあとかたづけ	31.7	(39.2)	12.8	16.3
部屋のそうじ	8.9	26.1	29.2	(35.8)
耳の穴のそうじ	7.7	6.7	8.8	(76.8)
焼魚の身をむしること	2.2	1.2	6.2	(90.4)
机の上のかたづけ	0.5	7.1	19.3	(73.1)

(　)は最頻値

甘やかし、はっきりしたしつけの原則や方針を持たずに、やみくもに子どもと接しているのがその背景だといわれる。

それを明らかにするデータを紹介しておこう。**表13・14**は、身辺自立ともいうべき「運動着の洗たく」や「机の上のかたづけ」など9項目について、子どもと母親にそうしたことを子どもがしているかどうかを尋ねたものである。まず表13をみると「運動着の洗たく」「下着の洗たく」は7割以上の子どもたちがいつも親にしてもらっている。ここに下着の洗たくまで親の手を借りなければならない甘えた高校生の姿が浮かんでくる。さすがに「焼魚の身をむしること」ではほとんどの子が自分でしている。しかし「たまに親がしてくれる」まで含めると、1割の子が親にしてもらっているという、情けない事実もみうけられる。表14は母親に「次のようなことを、お子さんはやっていますか」の結果である。子ども自身に答えてもらったのとだいたい同様の

表14　身辺の自立(母親)

——いつもしているかもしれない——

(%)

項目＼尺度	いつも親がする	ほとんど親がする	ほとんど子どもがする	いつも子どもがする
運動着の洗たく	(66.5)	28.1	2.8	2.6
下着の洗たく	(65.0)	27.8	4.0	3.2
制服の手入れ	(51.8)	26.9	11.4	9.9
ふとんを干すこと	(49.4)	33.7	11.6	5.3
自分の食器のあとかたづけ	28.0	(45.8)	17.3	8.9
部屋のそうじ	11.1	(36.1)	32.2	20.6
耳の穴のそうじ	7.5	11.9	21.6	(59.0)
机の上のかたづけ	1.1	7.4	40.5	(51.0)
焼魚の身をむしること	1.0	3.2	15.6	(80.2)

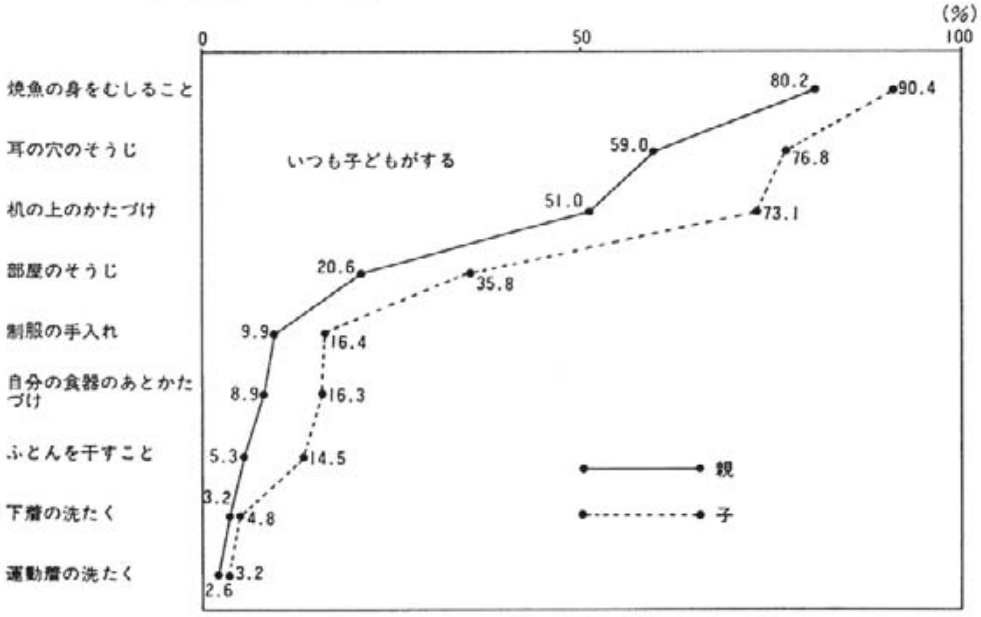
(　)は最頻値

結果が出ているが、この二つをまとめて図27のグラフでみてみよう。全般に子ども自身がいつも自分ですると答えている傾向が認められる。この開きは、子どもとしてはしているつもりだが、親の目からするとしているとは思えないという差から生ずるもので、たぶん親の判断の方が正確であろう。いずれにしても、どの項目も高校生であればだれでもできることで、親の手を借りずに自分でするのがあたりまえと思われるのに、自分でしている子の割合が意外な程に低いのに驚かされる。図28で、性差によっていくぶん違いがみられるのが「机の上のかたづけ」「部屋のそうじ」「制服の手入れ」で、その他は大きな差がなく、男女どちらも自立への遅れがはなはだしいということは、一昔前と比べ、男の子はともあれ女の子のしつけが甘くなっているのであろう。

このように自立を遅らせている原因はどこにあるのだろうか。しつけをするうえでよく

図27　身辺の自立

――子どもはしているつもり――



注意する言葉を、何歳ぐらいまで言ったか、また言われたかについて思い出して答えてもらったのが図29、30である。「今も言っている(言われている)」の多い順から並べてあるが、「早く起きなさい」「車に気をつけなさい」「言葉づかいに気をつけなさい」が親からの注意ごとのトップ3となる。このような注意を高校生になった今でも、半数近くの親たちが言っているという。これらは親が口出ししなくても子どもの責任においてなされていなければならないことで、こういうことを親が言っているあたりに、今の親子関係の甘えがみられるように思う。なお図30の子どもの方を見ると「勉強しなさい」がトップにあがっており、親はそんなに言っていないつもりでも子どもにはこの言葉が耳を離れないように見える。

図28　身辺の自立
——女子も自立していない——

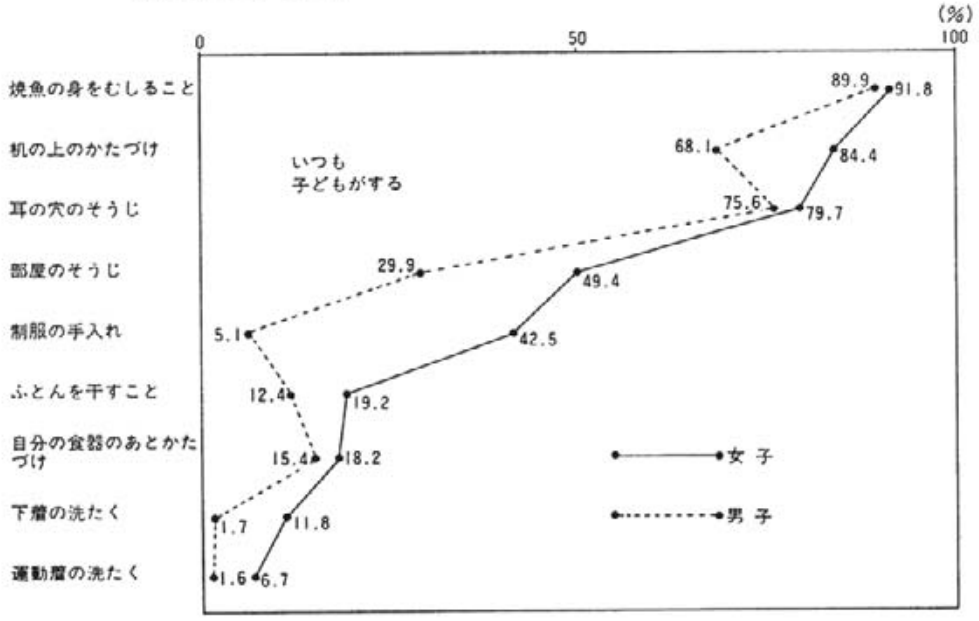


図29　子どものしつけ・注意(親)

――注意をしている――

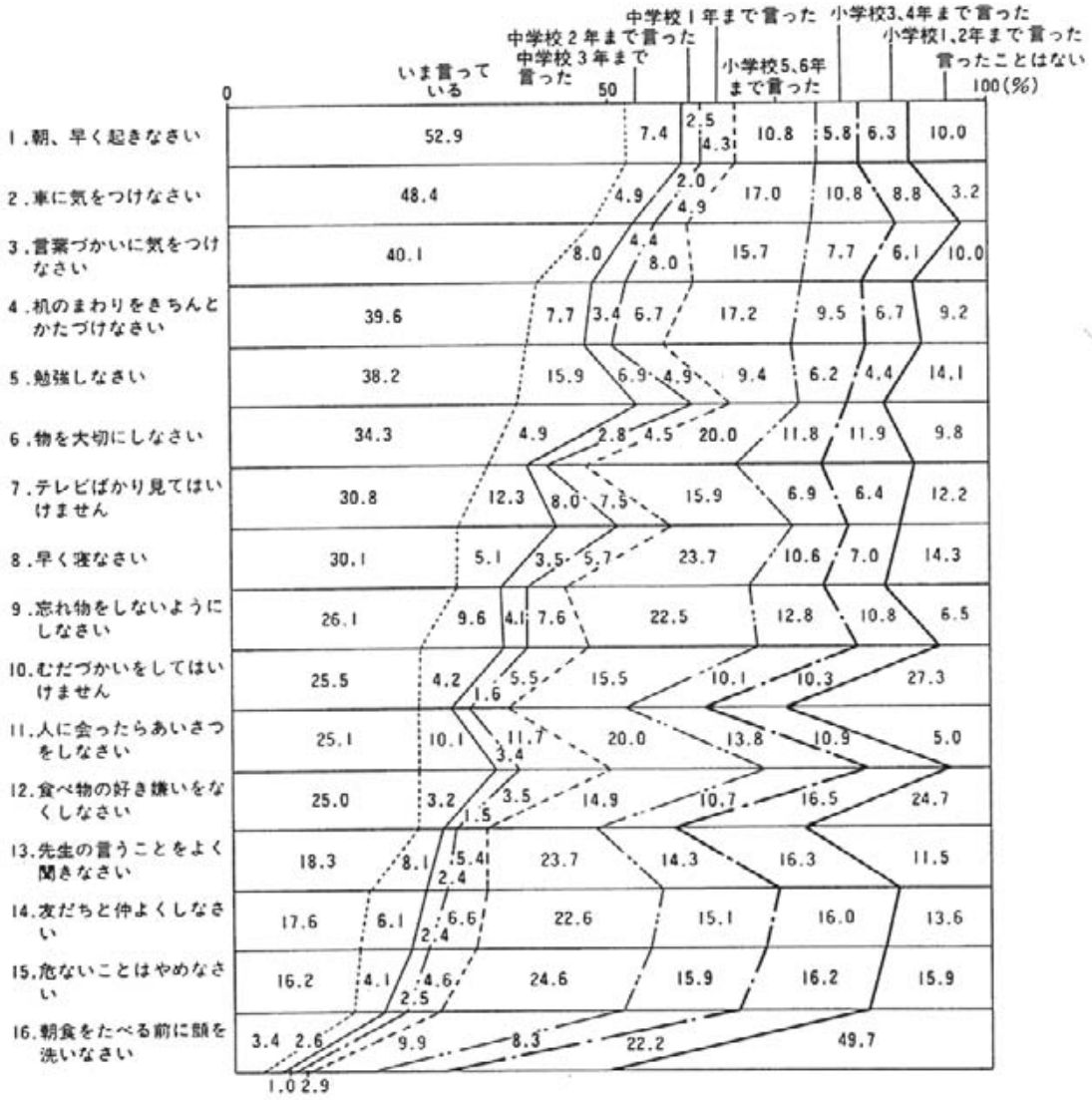
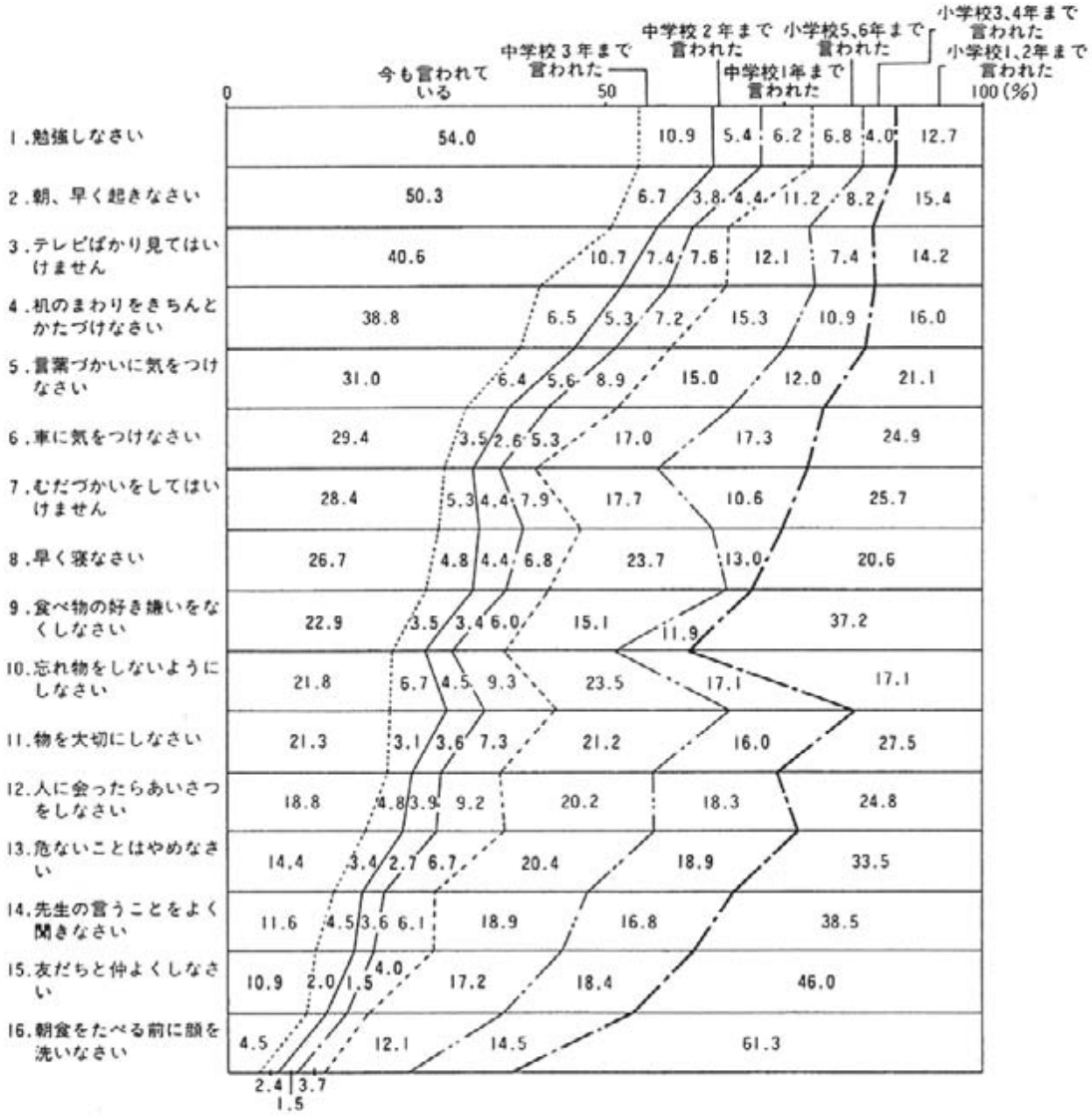


図30　子どものしつけ・注意（子ども）

——今も言われている——

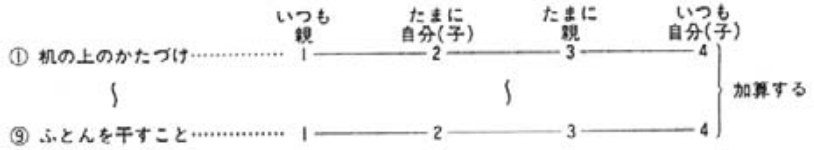


(2)自立できるタイプ

このように、いつまでも際限なく親が声をかけていたのでは、子どもの自立は難しかろう。そこで子どもの自立と親の注意との関係を調べたのが図31である。この図は表13、14で用いた身辺自立に関する項目を加算し、4つの群に分け上位A群を親頼り群、下位D群を身辺自立群として、その身辺自立の加算点と「子どものしつけ・注意」で今も言っている人たちとクロス集計した結果である。7.「言葉づかいに気をつけなさい」と12.「むだづかいをしてはいけません」以外はどれも親頼り群が高い割合を示している。親としては、子どもが頼りないから注意してしまうのであろうから、自立の遅れと注意とは両輪のようなもので、どちらが原因でどちらが結果ともいいがたい。しかし、高校生ぐらいになっても「早く起きなさい」と言うのは、それだけでしつけの遅れを意味していよう。

もっとも高校生ぐらいになれば、親に頼るどころか親が自分のことに手を出すのをきらい、自分の行動圏内から親を排除していくはずであろう。その後にやがて親の存在も認めることができるようになり、精神的におとなになることができる。そこで精神面での自立の遅れた子どもたちがいつごろおとなになれると思っているのかを、表15にあげる8項目について、親との比較の中で、親の力を越えたかどうか、また越えるとすればいつごろなのかを尋ねてみた。子どもにとってどんな分野においても、親を越えるということは重大な課題であり、親を越えた時に、子どもであることが終わる。

〈身辺自立の加算点算出方法〉



〈親〉

得点	%	群
9～18	22.4	Ⓐ 親頼り群
19～20	21.5	B
21～23	28.6	C
24～36	27.5	Ⓓ 身辺自立群

〈子〉

得点	%	群
12～19	22.3	Ⓐ 親頼り群
20～22	27.5	B
23～25	26.3	C
26～36	23.9	Ⓓ 身辺自立群

図31　子どものしつけ・注意×身辺自立加算点(親)

——親を頼んでいる子は自立の遅れが——

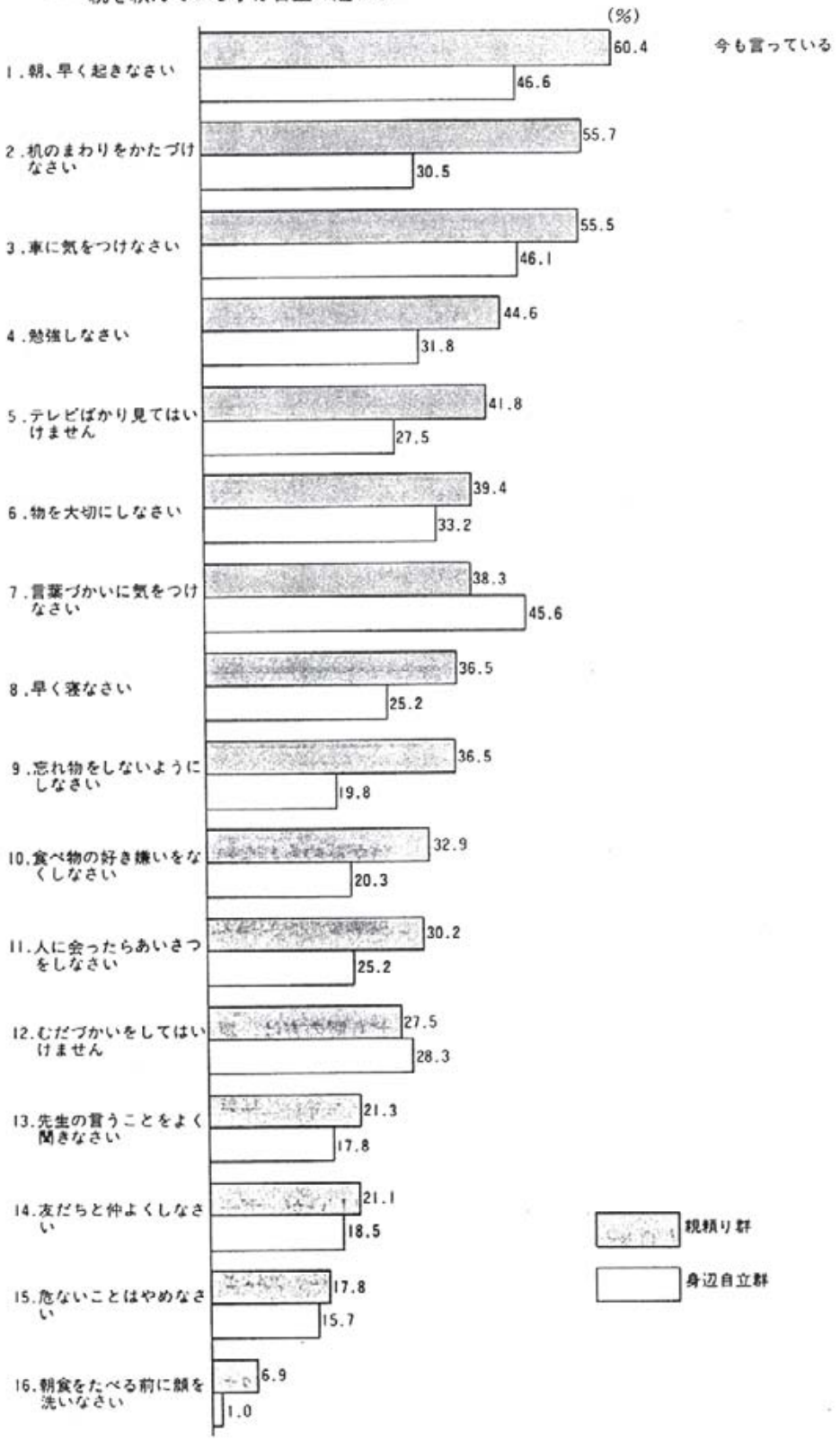


表15　母親の力を越えたと思うか（親自身の評価）
——子どもから越えられていない——

（%）

	越えた			越えるだろう		ずっと越えそうにない
	小学校高学年のころ	中学生のころ	このごろ	20歳ぐらいになれば	25歳ぐらいになれば	
数学の力	18.1	49.5	26.3	2.7	0.8	2.6
	93.9			3.5		
英語の力	6.2	61.2	23.6	5.5	0.9	2.6
	91.0			6.4		
体　力	12.7	45.8	25.8	9.5	1.9	4.3
	84.3			11.4		
がんばる力	8.2	20.7	26.9	25.8	9.9	8.5
	55.8			35.7		
人とのつきあい方	3.5	9.7	16.0	36.1	24.9	9.8
	29.2			61.0		
社会についての見方	1.0	6.6	16.1	44.3	25.2	6.8
	23.7			69.5		
社会常識	0.6	5.8	14.4	42.7	28.8	7.7
	20.8			71.5		
お金をかせぐ力	0.4	0.2	2.0	29.2	60.7	7.5
	2.6			89.9		

(3)母を越えられるか

まず、母親に尋ねた結果をみていくと「数学・英語の力」は「このごろ越えた」まで加えると94%、「がんばる力」でも56%と、子どもの成長を認める評価が目につく。さすがに「お金をかせぐ力」は3%しかないが、これも25歳ぐらいになれば越すだろうという見通しを抱いている。母親にすれば子どもが早く自分を越えて、もっとすばらしい人間になってほしいという願いがこめられているのであろうか。表16に子ども自身が母親に勝ったと思うかどうかを尋ねた結果を示した。「勝った」と思う割合が多い順は表15と同じだが、「数学・英語の力」「がんばる力」「人とのつきあい方」「社会についての見方」「社会常識」については、母親が思っているほど自信が認められない。さらに「がんばる力」「人とのつきあい方」などは2割以上の子どもが母親をずっと越えないだろうと思っているのが目につく。自分を越えられそうもないと思う母親はどの項目も1割以内であるのに、子ども側の方は、親の倍もの子が、親を越えられそうもないと思っている。経済的問題は別としても、「社会についての見方」や「社会常識」などこれからを生きる若者として、新鮮な感覚で親を乗り越えるぐらいの力を持ってほしいが、データをみる限り、そうした願いは高望みにすぎるように思える。

最後に、先ほど、生活習慣の自立に関係して、親頼り群と身辺自立群を抽出したので、そのグループと親を越えたかどうかをクロスさせたのが図32である。

図から明らかなように、予想に反し、自立

表16　子どもが母親に勝っているか（子ども自身の評価）

——母を越えにくい——

（%）

	勝った			勝てるだろう		ずっと勝てないだろう
	小学校高学年のころ	中学生のころ	このごろ	20歳ぐらいになれば	25歳ぐらいになれば	
数学の力	12.6	49.2	24.7	7.1	2.1	4.3
	86.5			9.2		
英語の力	6.8	55.6	24.8	6.9	2.7	3.2
	87.2			9.6		
体　力	24.5	44.6	19.5	6.0	2.1	3.3
	88.6			8.1		
がんばる力	2.6	6.8	15.4	30.1	21.2	23.9
	24.8			51.3		
人とのつきあい方	1.8	4.5	10.3	28.6	26.6	28.2
	16.6			55.2		
社会についての見方	1.5	3.1	10.1	33.2	34.7	17.4
	14.7			67.9		
社会常識	1.4	3.3	11.6	32.2	33.5	18.0
	16.3			65.7		
お金をかせぐ力	1.4	0.9	2.9	33.7	47.0	14.1
	5.2			80.7		

群より親頼り群の方に、親を越えたと思っている子が多い。親に頼りきりで、自分ですることが少ないので、おとなの力を過小評価し、実際には母親の力を越えていないのに、自分では、母親を越えたと考えている。そうとらえると、親頼り群の反応に自立の遅れが顕著な形であらわれているのを感じる。

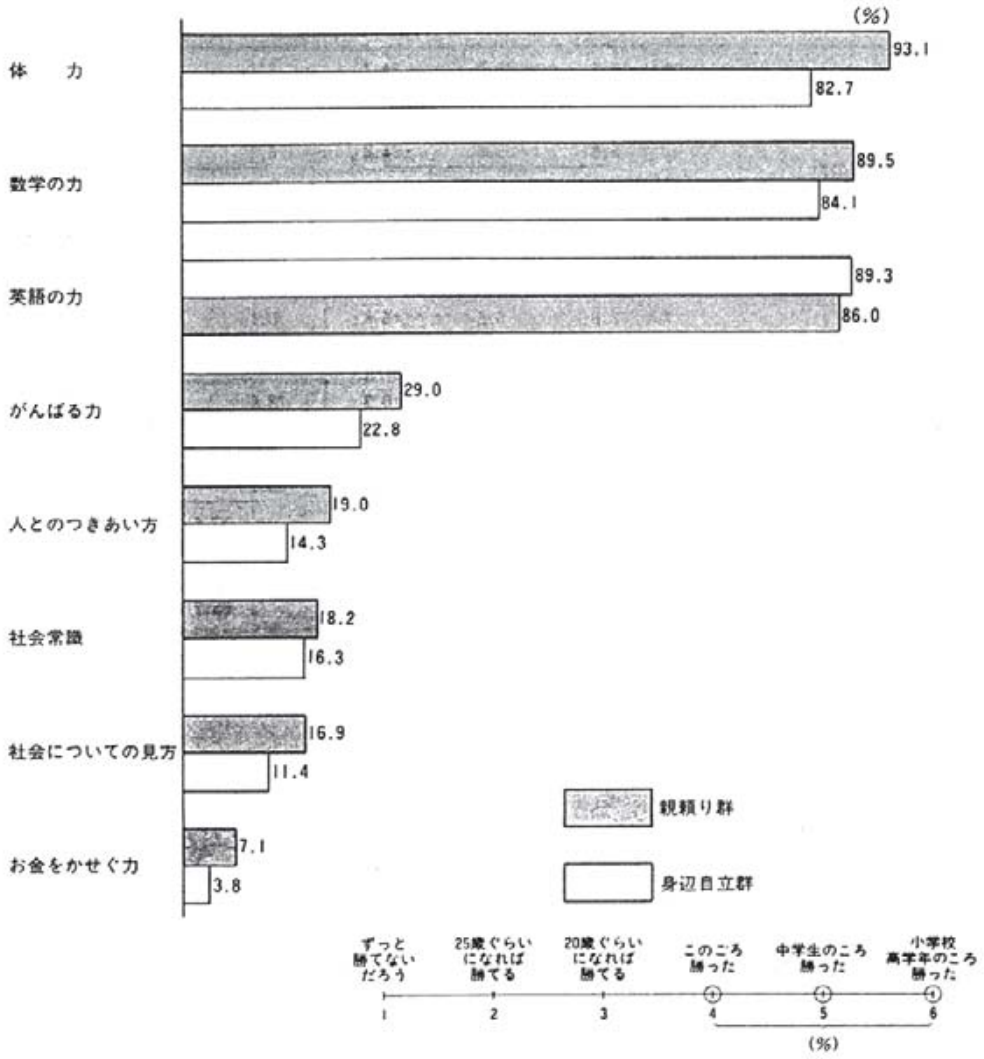



図32　母親を越えたか×身辺自立加算点(子ども)